後藤　絵美、竹村　奈々花、三宅　夏芽

GOTO Emi, TAKEMURA Nanaka, MIYAKE Natsume

《書評》

村田晶子・森脇健介・矢内琴江・弓削尚子著

『ジェンダーのとびらを開こう―自分らしく生きるために』

（大和書房、2022年、320頁）

Jendā no tobira wo hirakō: Jibun rashiku ikiru tame ni（How to be Yourself: Opening the Door to Gender）. By Murata Akiko, Moriwaki Kensuke, Yauchi Kotoe, and Yuge Naoko. Daiwa Shobō, 2022.

本書は10代の読者を主な対象として設定した「ジェンダー」に関する入門書である。その最大の特徴は、高校生と大学生からなる５人の登場人物の経験を軸に、主に会話形式で物語が展開していく構成にある。冒頭におかれた４頁の漫画は、読者が各登場人物のイメージをつかみ、自分自身もかれらの会話の輪に入っているような感覚を味わうことができるようにという工夫であろう。本書は全８章からなる。各章のタイトルには、それぞれの中で扱われる主なテーマが示されている。

はじめに／登場人物紹介

１章　ジェンダーって何だろう？――ジェンダーと自分らしさ

２章　「男性／女性」だけじゃない――ジェンダーと多様性

３章　性の多様性をめぐる過去と現在――ジェンダーと歴史・制度

４章　家族の「当たり前」を見直す――ジェンダーと家族

５章　まじめにしゃべろう、恋愛と性――ジェンダーと身体

６章　だれもが活躍できる社会へ――ジェンダーと仕事

７章　なんで、メイクはマナーなの？――ジェンダーと自己表現
８章 「隠れたカリキュラム」――ジェンダーと学校
エピローグ　それぞれの未来へ
おわりに／参考文献・Webサイト

以下ではまず、各章の内容を紹介し、その後、本書を通して評者らが考えたことを記す。なお、本書評は、イスラーム圏のジェンダーを研究テーマとする後藤が企画し、本書の読者対象である10代の竹村と三宅に協力を依頼し、共に執筆したものである。全体の構成と内容紹介（１章から４章)、後半の会話の進行および書き起こしは後藤が担当した。内容紹介（２人が特に関心を持った５章から８章）と会話での回答部分は、竹村と三宅によるものである。

本書の第１章では、「ジェンダー」という言葉の意味がさまざまな方向から検討されている。ジェンダーとは、一般に「社会的・文化的につくられた性」と説明されるが、それは「男らしさ」や「女らしさ」が、社会、文化、時代によってつくり出されてきたという理解のあり方とも言える。ジェンダー問題とは、性による差別が生み出してきた問題であり、それに向き合い、考えることで、人は「自分らしく生きる」ための一歩を踏み出すことができると主張される。

第２章が扱うのは、性の多様性をめぐる話題である。人はたいてい、生まれてすぐに、身体的特徴を根拠に「男」と「女」に分けられる。そして、「男」は「女」に、「女」は「男」に恋愛感情や肉体的欲求を感じると一般に考えられている。しかし実際には、人間の身体のつくりは多様であり、また体の性と心の性がつねに同じになるわけではない。さらに、恋愛対象についても、様々なパターンがある。つまり、「男」と「女」という二つの極の間に、さまざまな人がいると理解することも可能である。

第３章と第４章では、ジェンダーを歴史的に考えることが促されている。第３章では、性の多様性をめぐる理解が、第４章では家族の中の男女の役割をめ

ぐる認識が、それぞれ近代という時代の中で、否定されたり、狭められたりしたことが指摘される。日本では明治維新以降、近代国家として富国強兵政策が取られる中で、国防を担う男性と国民を生む母体としての女性という形で男女の二元論が強まった。イエ制度が法制度の中に含まれ、家族内での男女の位置づけや役割に対する考え方の固定化が強まったのも、明治時代のことであった。その後100年以上が経つ中で、より緩やかな捉え方が少しずつ受け入れられてきたが、たとえば、同性婚に対するハードルや、専業主婦や選択的夫婦別姓をめぐる議論など、過去からの影響を受けたジェンダー問題にまつわる課題は、いまだに多くあることがわかる。

第5章では、ジェンダーやセクシュアリティなどに関することが語られた。性や身体のこと、対人関係のことなど、人は普段の生活の中でさまざまな疑問や違和感を抱く。そして多くの場面で悩み、我慢を強いられ、生きづらさを感じることもある。さらに、気づかぬうちに被害者にも加害者にもなりうる。たとえば、性暴力や性的同意の有無といった問題が挙げられる。自分のセクシュアリティや生き方を大切にし、周囲からの理解を得ることが性や恋愛の問題において必要不可欠だということが示される。

第6章では、仕事や職業におけるジェンダーが取り上げられた。ここでは、性別分業意識が根強く残っているために、女性が社会で思うように活躍できていない現実について書かれている。誰もが活躍できる社会を作るためには優遇措置を取り入れ、格差の改善を図る必要があると主張される。

第7章では、ジェンダーと自己表現の多様性が扱われている。たとえば、小中高校生はメイクをすることが校則で禁止される場合が多いが、大人の女性はメイクをしていないとマナー違反と言われることもある。さらに、最近では性別にかかわらず、メイクに関心を持つ人も多い。また、言葉づかいや振る舞い方についての男らしさや女らしさに関する決まりもあり、より深刻なものとして、女の人は話すなという教育の歴史が受け継がれている部分がある。性別の違いで、表現の仕方や有無に大きな差が出てくることは問題だと指摘される。

第８章では、高校生 3 人がクラスメイトとの対話の中で気がついた、学校にあるジェンダーに関する問題について書かれている。学校には授業で直接的には教わらない「隠れたカリキュラム」が存在している。学校にも社会と同じようなジェンダーのルールがあるのだ。ジェンダーの差別意識や考え方は学校教育の中でも自然に形成されている。章の最後には、３人がジェンダーのルールに左右されず「自分らしさ」で将来を考えようとする姿勢が描かれる。

エピローグでは、数年後の登場人物５人の姿が描かれる。ジェンダーのとびらの向こうにかれらが見つけたのは、さらなる疑問や、「あたりまえ」に対する違和感、そして、「自分らしく生きる」ためには、他人の生をも大切にする必要があるという気づきだった。

ジェンダーという語の意味に始まり、過去から現在までの、政治・社会的な出来事から、身近な日常生活にまつわる事柄まで、さまざまな性をめぐる話題が取り上げられる本書を読み、評者 3 人は、それぞれ多くのことを考えた。以下では、その一端を本書にあやかって会話形式でお伝えしたい。

本書の形式・読みやすさ

後藤「この本は、高校生の友人同士の会話とか、大学生との会話、セミナーへの参加、大学の講義、それからLINEや電話でのやり取り、それに動画の内容が文字で表現されていて、他の本とはずいぶん形式が違うよね。読みやすさはどうだった？」

竹村「漫画から入って、その後も自然な会話から始まっていたから読みやすかった。」

三宅「確かに。自分もそこに一緒にいるみたいな感じで読めた。」

竹村「ところどころにメモとか資料があったのもよかった。会話や文章だけが続くよりも内容が理解しやすかった。ただ、４章とか、文章が長々と続く部分が多いところは、正直、あまり集中して読めなかった。」

後藤「４章って、大学の授業のところ？　授業ってああいう感じだから、（大学で教えている）私はむしろ読みやすいと思ったけど、高校生にとってはそうでもないのかな。」

三宅「私も、もう少し学生の意見なんかが入るとよかったかもしれないと思った。」

「ジェンダーのとびら」は開いたか？

後藤「この本を読んで何か変わったことはあるかな。」

三宅「普段の生活で何か変だなと思うことがあっても、その場の雰囲気を壊すのもどうかと思って、言葉にしてこなかった。友達と少し話したこともあるけれど、それほど盛り上がらなかったし。この本を読んで、同じような違和感をもつ人が他にもいるとわかって、自分の感覚は間違ってなかったんだと思った。」

後藤「たとえば、どういうこと？」

三宅「高校の体育の授業で、男子は柔道、女子はダンスと決まっているところとか。名簿が混合なのに、先生たちが〇〇くん、〇〇さんって呼び分けしているところとかもそうかな。先生によってかなり違うけど。先生が男女を区別し過ぎると、そういう雰囲気が全体に広がってしまうんじゃないかって心配になる。」

竹村「確かに、学校ではジェンダーとかセクシュアリティとか、そんな話題にはならないよね。ただ、私の高校は海外経験がある子も多くて、個性的なのがあたりまえだから、一方的に何かを押し付けられたりする感じもないけど。それに、先生たちはたいてい男子に厳しくて女子に優しいから、女子で得したような気にもなるかな。」

三宅「それはあるよね。」

竹村「私は正直なところ、この本を読んでも、「ジェンダー」という言葉の意

味が理解しきれていない気がする。でも、男女で区別をしたくないとか、体の性とか性表現とか、そういうことを大切にする人がいるということがわかったのは、よかったと思う。」

今とこれから

後藤「とくに興味を持った話題をあげてくれる？」

竹村「メイクの話とか、ジェンダーと自己表現のところかな。今だとマスクもここに入るかもしれない。」

三宅「確かに。うちの高校では男子は皆マスクを外しているけど、女子はしている。」

竹村「うちの学校は、女子も半分くらい外しているよ。女子の場合、予防のためもあるけど、男子に顔を見せたくないって子も多いよね。」

後藤「二人も学校では外していないよね。なぜ？」

竹村「私にとってはファッションの一部だから。見せたくない部分を隠せるし。」

三宅「顔を見られるのがイヤだっていうのはある。でも友達同士だと、外している方が会話は弾むよね。奈々花ちゃんと会うときはいつも外しているし。」

後藤「なるほど、マスクをするかしないかは、相手しだい、環境しだいというところもあるのね。……ジェンダーに関しては、二人は今度、どうなっていくといいと思う？」

三宅「性別で区別されないようになるといい。でも、少女漫画なんかを読んでいると、性別があるから楽しめるっていう部分もあると思うこともある。」

竹村「男女の身体の違いについては皆が知っておくべきだと思う。その上で、誰もが「同じ」じゃないということをわかって、たとえば、BLとか百合とか、普通の漫画とかが、全部並べて、楽しめるような環境になるといい

と思う。」

後藤「区別は一切ダメという押しつけではないってことだね。性別に縛られないで、自分らしく生きられる社会が理想ということかな。」

竹村・三宅「そうだね！」

以上が、評者らが話し合った内容の主な部分である。本書をきっかけに、普段あまり話す機会のない話題にしっかりと向き合えたことが嬉しく、また楽しかったというのが、3人に共通した感想である。そして、本書のメッセージが、10代の読者だけでなく、親世代や学校教職員の方々をはじめ、若い世代と接するすべての大人に届くことも願っている。